

「北極圏旅行記 2017 夏 (25)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

～7/31 北極圏の離陸シーン～

今回は車で 2000km 以上の旅行だが、滞在日数は少ない。この日は再び国境を越えて、スウェーデンのアビスコまで行く予定になっている。しかし、同時に今回の旅行でノルウェー国内を走る最終日でもある。ロフォーテン諸島とも、しばらくお別れなので、できるだけ美しい風景を見て、たくさん写真に撮っておきたいと思った。



海峡の橋を渡って Langøya (ラング島) に入ると、さっそくすばらしい風景に出合った。湿原の彼方に、特異な山容の山が見える。標高は 200m ぐらいしかないが、明らかに氷食地形の一つである。バス停の小屋があったので、少し休んでいくことにした。



これは実に珍しい道路標識だ。「飛行機注意！」実際にこの道は、滑走路の端ギリギリにある。さすがに

自動車と飛行機が接触するような設計にはなっていないだろうが、離着陸時にはエンジン音や風圧がものすごいだろう。



この空港は Stokmarknes Lufthavn (ストクマークネス空港) というノルウェーのローカル空港である。オスロからの直行便こそないが、ボーデ→レクネス→当空港→トロムソという北へ向かうローカル線の経由地である。ほとんど路線バスのような飛行機だ。スケジュールによると、ちょうど 40 分後に飛行機が離陸する。私は小さな飛行機が好きなので、離陸時刻まで待って、離陸の一瞬を撮影したいと思った。



少し時間があつたので、撮影場所を検討してみた。上図は空港付近の航空写真である。Aが国道(この日は右方向に向かう)、Bが空港ターミナル、Cが滑走路である。小さな空港とはいえ、空港付近は立入禁止の場所が多く、滑走路のそばには行けそうもない。唯一、Dに墓地と小さな教会があり、国道からの道も確認できた。どうやら、撮影にはこの墓地の前の駐車場が一番適しているようだ。



さっそくその墓地前の駐車場に行き、レクネスからの飛行機を待った。飛行機は霧の中から現れた。双発のターボプロップ機（プロペラ機）のようだ。レクネスから陸路では、フィヨルドを回り込んで4時間以上かかるが、飛行機なら直線航路で20分ほどだ。旅行者だけでなく、住民の足としても大いに役立っているのだろう。

飛行機は何人かの乗客を乗降させて、すぐに離陸準備に入った。その間わずか10分ほど。まさに「空飛ぶバス」といった感じである。



この空港の滑走路は1本で、方位（滑走路番号）は27と09である。27は真西に向けての離陸・着陸、09はその逆である。機は09から進入し、同じ09から離陸するようだ。滑走路の端まで行って、Uターンし離陸態勢に入った。上写真の手前が、墓地である。

離陸の一瞬、ララローセン（ヤナギラン）を手前に、満足のいく写真が撮れた。今回の旅行で私が撮った写真の中で一番気に入っている。この写真は「グーグルマップ」のStokmarknes Lufthavnに投稿しておいたので、ご覧いただきたい。

